

人生の指針ともなる『論語』

石井式漢字教育の教室や多くの実践園では、子どもたちが先生の後に続いて『論語』の一節を音読する光景を目にすることができます。

『論語』とは、ご存じのように儒教の祖、孔子とその弟子たちとの問答を集めた書ですが、なぜ、わざわざ幼児期の子どもに大人でもめったに紐解くことのない『論語』などを与えているのでしょうか。

それは、『論語』の中には、すでにお話したような古典独特の豊かな言葉の響きやリズムがあることに加え、一つの思想という範疇を超えた、人生の真理や生きていくうえでの指針となる言葉が豊富に散りばめられているからです。

たとえば「温古而知新(故きを温めて新しきを知る)」「過猶不及(過ぎたるはなお及ばざるがごとし)」などは、今なお、諺同様に、私たちの生活の中に根付いている人生の知恵とすることができますし、「見義不為、無勇也(義を見てせざるは勇なきなり)」「己所不欲、勿施於人(己の欲せざる所、人に施すことなかれ)」「過則勿憚改(過ちては則ち改むるに憚ることなかれ)」といった言葉は時代を超えた普遍的真理と言ってもいいでしょう。

もちろん子どもたちには、まだ言葉の意味を深く理解することはできませんし、先生も「どういう意味？」と聞かれない限り、解説を加えることはありません。子どもたちは、言葉の意味よりも、もっぱら下の字

を先に読んだかと思うとまた上へ、という漢文独特の読み方やリズムに惹きつけられて面白がって読むのです。

ところが、そのように今はただ楽しくて繰り返し読んでいるだけでも、成長していく中で「ああ、あれはこういうことを言っていたんだな」と、その意味を自分なりに感じ取ることができるようになるのです。

それは最初から「これはこういう意味の言葉なんだよ」と教えられるよりはるかに価値のあることであり、そこで得られた理解は子どもたちが生きていくうえでも大きな財産になるのではないかと思っています。